

子どもの心もちと私



豊田一秀

はじめに

子どもと親しくなることは、保育における基礎であると言えると思います。その子にどんなに必要な事がらや、その子どもの生活を豊かにする物事などを与えるようにしても、子どもにそれを受け取ろうという気持ちが必要ならば、子どもにとって保育者はうるさい、おせっかいやきな大人でしかないでしょう。

そう考えた時、一時^{いつま}い^いわゆる教育的と言われる事がらを保育者自身が忘れて、あるがままの子どもの心を、良い悪いではなしに理解してあげる必要があると思います。

私は三年前から週一度、知恵遅れの幼児と接する一方、昨年から幼稚園に勤めています。その限られた経験の中から、私^{わたし}が子どもたちと遊ぶことを通して感じたこと、考えたことを述べたいと思います。

子どもをいきいきとさせる基本的要素

おなかをすかせた子どもは不機嫌です。

眠い子どももぐずります。その子どもにもおいしい食事と心地よいベッドを与えたら、その子どもはよく食べ、よく眠るでしょう。そして起きた時、彼は活き活きとした眼差しを外の世界に向けていることでしょう。

ちょうどそれと同じことが、子どもの心についても言えるように私には思えます。愛されているという安心感、その人に対する信頼感、自分のしたい面白いことがそこにあり、いくらしても、また全くしくてもよいという自由さ、それらの満足感が健康という身体的要素と一緒にあって、活き活きとした子どもを作ります。

では子どもは、どうすると愛されていると感じ、何を面白いと受けとめるのでしょうか。

うか。

私は知恵遅れの子とも、そうでない子の双方の子ともと遊んでいます。子どもの気持ち、興味のあり方は、両者全く同じであると思います。

自分は愛されていると無条件に子どもが安心できる第一のものは、身体的接触です。また子どもが最初に興味を示す遊びは、「面白い」遊びよりも、むしろ「気持ちのよい」遊びです。従って子どもが未分化であればある程、愛されているという安心感と、遊びは切り離せないものであります。

そこで私がよくする遊びに、おんぶやだっこ、肩車、くすぐりごっこ、すもう、レスリングなどがあります。これらの遊びを

通して、子どもは私を身近に感じてくれます。ここで一つ気を付けなければならぬのは、遊びを始めるきっかけと方法です。

子どもが心を開いたから抱かれようとするのか、抱かれたから心を開くようになったのかは、非常にむずかしく、また微妙な問題です。それは正に保育者とその子ども二人のみの関係でありますので、文章化するのには困難ですが、私が常々心がけていることは次の点です。

一、自分の身体が楽しそうに活き活きとしていること。

二、私とその子どもと関わりを持ちたいと思っているという気持ちを表に出さないうこと。

三、むやみに視線を合わさないこと。

四、三に付随して、自分がその子どもの様子を見るよりも、自分が何かをしている所をその子どもが見るように姿勢をとること。

そして時を見て自然に遊びが始まるよう心がけます。

また前述の体を使った遊びの発展の一つとして、私はよく「注射ごっこ」をします。これは子どもと遊んでいるうちに自然にできたもので、子どもが私の腕や胴に「怪獣になる注射、エイッ」と言いつて指で注射をします。すると私はしばらく苦しそうに頭をかかえてから、怪獣になって子どもたちを追いかけます。正にクモの子を散らしたように逃げ出す子どもたちを私はつかまえると、子どものおへそを食べようとするのです。最初少し恐がっていた子どもも、慣れてくるとしつこく注射をしにやって来ます。

そんな遊びをしていたある日、私に追いつめられて、今にもおへそを食べられそうになった一人の子どもが、苦しきまぎれに「えいッ、それじゃやさしくなる注射ッ」と言ったので、私はすかさずやさしいお父

さんのような声で「〇〇ちゃん大大好き」と言って強く抱きしめると、彼は「わー助けてくれー」と言いながらも、とてもそれを楽しんでいるようでした。それ以後は「怪獣になる注射」や「やさしくなる注射」の他に「怒る注射」（子どもたちを怒る）、「泣く注射」（私が泣き虫になる）、「弱くなる注射」（力がすっかりぬけてしまっ

心の発散

ふり返って思うに、この遊びは子どもの中のいろいろな要求を満たしていると思います。身体的接触はもちろんのこと、逃げるスリル、思いきり走る気持ちよさ、加減なしに怪獣をやっつけられる気持ちよさ、また、そうしても大丈夫だという安心感等々、子どもの力をそっくりそのままぶっつけられる遊びだと思っております。

てみんなにやっつけられる）など、様々な注射が発明されて、三歳児から五歳児まで一緒になって遊んでいます。いつもいばつてばかりいる体の大きな年長の子どもが、さも自然そうに、でも少し小さな声で「エイ、やさしくなる注射」などと言うと、私は心の中ですっかりうれしくなってしまうのです。

そうして考えて行くと、「発散」ということも子どもを生き活きとさせる大きな要素であることに気が付きます。自分の溢れるばかりの生のエネルギーを発散し切つて、それをそのまま受けとめてもらえた時の子ども達の満足感、彼を活発にさせるだけでなく、落ち着いた状態にさせるのです。

次に発散に関係していることで、子どもの遊びの順序性というものがあるように思えます。簡単な遊びから複雑な遊びへと進むことは一般に言われていますが、それ以前のものとして、それは前に述べたように気持ちのよい遊びから面白い遊びへと順序であります。これはこわす遊びから作る遊びへ、または発散する遊びから集中する遊びへと言い換えることも可能です。絵のきらいな子どもフィンガーペイントは喜ぶ場合が多いですし、工作にすぐあきてしまう子どもも、紙をめちやくちやにやぶく遊びには長い間集中することもありません。

さらにはっきりして面白いののは、砂場での山作りです。「山を作ろうよ」と誘いかけても視線を下に落としたままの元気のないうちどもも、前もって高い山を教師が作っておいて「一緒にこわしちゃおうよ」と誘うと、目をキラッと輝かして、山に登

ってこわし始めます。そして夢中になってこわしてしまおうと、さっきまでの無口はどこへやらで、「ねー、もう一度山を作ってみようよ」などと言いつつ出ます。

子どもに何かを与える時には、心の発散という事——その素材がその状態の子どもにどう作用するか——を充分考える必要があると思います。「こわす」という素地の中から「作る」が生まれ、それが少しずつ「創る」に発達して行くように私には思わ

因 った 子 ども

どこの幼稚園にも乱暴な子どもはいません。すぐにカッとなって手が出てしまうのです。特にそういう子どもと私はよくレスリングや、すもう、それになぐりっこをします。これは子どもの一番の力で私の腹をぶつ遊びです。ルールは、やる前に「やる

れてなりません。

そう考えた時、砂や粘土、特に粘土はその安価さ、くり返し使える便利さにプラスして、さわって気持ちがよく、何でも作れ、またすぐにこわせ、さらに芸術的に高い次元にまで発展させられる、非常にすぐれた素材であると思います。またそれと平行して様々な水遊びも、遊びの中における特に根源的なものとして、じっくり遊ばせてあげたい遊びです。

ぞろぞろ」と声をかけることと、絶対に加減しないでやることの二つです。やるぞ、と言わすのは、不意にぶたれるときすがに私も痛いためと、もう一つは、ついつい無意識の間に手が出てしまう子どもに、その次の行為を意識させるためです。こうして遊ん

でいると、普段力をもてあましている子どもたちは目を輝かせて私をやっつけに来ます。また「ケンカなんか悪いんだよ」などと云ってばかりで体の動かない子どもも、最初は横目でチラッと見ていて、そのうちおっかなびっくりぶちに来て、ついにはそれこそ怪物のような顔をして力一杯かかって来るようになります。

一般に家庭において、子どもが乱暴をすることに對して否定的な反応を親はとることが多いと思います。ぶっつはいけないことを言い続けていると、子どもはぶたなくなるという訳ですが、私が感じる限りでは、それは一面的であるように思います。

たとえ禁止されても、そうしてみたい気持ちには、少しもなくなる場合が多いです。むしろその事によって自分は親に愛容されていない——良い子と思われていない——という不快感、不安定感を子どもが持ち、その行為をより激しいものにしたたり

するものです。「そうしたい、だけど親からは叱られる」という葛藤状態は、しばしば子どもを非常に非理性的にしまい、子どもの心を益々かたくななものに追いやってしまう場合と、子どもを全くいじけた存在にしてしまう場合があります。ですから、そういうエネルギーは、早く発散して卒業してしまつた方がよいのです。

なぐりっこは決して上等な遊びではありませんが、それが癖になって誰彼の区別なく人をぶつようになることは決してありません。子どもはその遊びに関して、自分を受け入れてくれる人と、そうでない人を驚く程の敏感さで感じ取るものです。そしてその子どもを受け入れてくれる人間を、その子どもも受け入れるのです。

子どもがその遊びに飽きた時、もう以前のようにすぐにカッとなることはなくなってきました。また頭でっかちの子どもも少し体が動くようになってきます。そして時々

「ねー、ちょっとやらせてよ」などと言つては、私の腹筋を鍛えていってくれます。ぶつことのほか、幼稚園嫌い、甘えてばかりいる、きたない下品な話ばかりする、すぐ悪口を言う、などの一見困つた事からもそれと同じであると思います。これらの行動に對應した様々の遊びについては、紙面の関係で述べられませんが、すぐに直接的にその行為を禁止するのではなく、発散と満足でその事がらを卒業し忘れてしまうようにすることが、結局その子どもにとつての発達の近道ではないでしょうか。

子どもが心を許して行く過程において、それまでの葛藤や抑圧が強かつた子ども程、発散する行為が始まりにくく、一度始まると激しく、またしつこく続くものです。それと並行して一般的に、子どもが教師に心を許し始めた時、子どもは非常に活発になり、大人を困らせることを多くするようになることがあります。悪口で教師の

名を呼んだり、呼びつけにしたり、ぶちに
来たり、言うことをわざとできなかったり
する子どもを見る時、なぜそのような形で
しか自分の愛情を表現できないのかと、そ
の子どものそれまでの生活がかわいそうに
思える時が私にはあります。むろん時の流
れの中で、そういうような表現をする必要
がなくなると、自然にそれらは消えて行っ

自由な子ども

私は子どもを生き活きとさせる最大の要
素は、自分は愛され、ありのままを受容さ
れているのだと子どもが自分で思えるよう
な環境を設定することであると述べて来ま
した。人に対して安心感、信頼感を持ち、
自分の興味、関心が満たされている子ども
——彼は自分が好きな人間に対しては素直
に愛情を表わすでしょうし、いやなことは

てしまうものなのですが。子どもが自分の
問題を自分の中で昇華して行くには時が必
要です。しかしそうして発達の階段を飛び
越すことなく一段ずつ登って行った子ども
は、おだやかな目と他人に対する暖かさを
持っているに違いありません。ケンカので
きない子どもとケンカをしない子どもは、
根本において全く異なるのですから。

いやだとはっきり表明するでしょう。

そういう自由な子どもをニュートラルな
子ども、またはゼロの状態の子どもとは言
えないでしょうか。

私は教育には大きく分けて二つの種類が
あるように思います。すなわち一つはゼロ
からプラスに向かう教育、これは子どもの
生活をより豊かにする教育といえるかもしれ

れません。そしてもう一つは、マイナスか
らゼロに向かう教育です。私は今まで終始
この後者の教育について述べて来ました。
もしかすると、この教育こそが家庭でなさ
れるべき教育かもしれません。しかしたと
えそうであったとしても、全ての教育機関
は、このマイナスからゼロに向かう教育を
忘れて、ゼロからプラスに向かう教育の成
果をあげることは不可能であると思いま
す。しかも子どもは環境の変化によつてい
つでもマイナスに戻って行ってしまう可能
性を持っているのですから。

北風と太陽という話が私は大好きです。
大人がかたくなに北風になっていないで、
太陽にさえなれば子どもはすぐに彼らの心
のコートを脱いでくれるものです。そして
大人が与えた愛情をけっして偽ることな
く、何百倍にもして私たちに返してくれる
のではないのでしょうか。